

インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

目次 contents

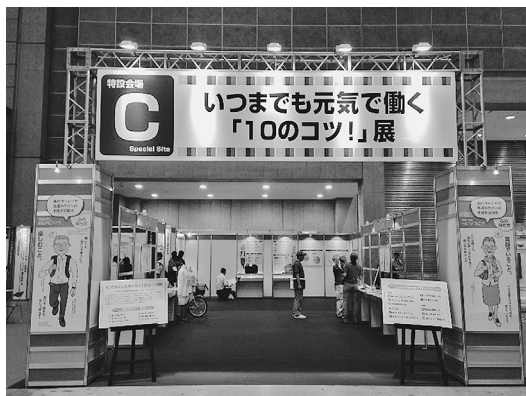
第42回、国際福祉機器展 主催者特別コーナー ～いつまでも元気で働く10のコツ！展～報告（星川安之、田窪友和）	2
コンビニエンスストアに関する良かったこと調査報告書、 イラスト版公開へ（森川美和）	4
【新刊紹介】『アクセシブルデザインの発想 不便さから生まれる「便利製品」』（岩波ブックレット） 共用品推進機構専務理事 星川安之著	5
ボディソープ、触覚識別推進への感謝 日本盲人会連合会から、日本化粧品工業連合会へ 感謝状贈呈式	6
「平成27年度ADフォーラム」開催 「平成27年度全国盲学校長会秋季代表者研究協議会」 子供向け事業の連携を推進	7
読む人の心をパタパタと開く 故・小松昌樹さんが創りだした 共用品パンフレットの世界	8
アクセシブルデザイン 国際標準化 進捗状況 共用品推進機構 標準化事業に関わる賞W受賞	10
<キーワードで考える共用品講座> 第89講 「社会の要請と共用品（その7：国連『持続可能な 開発目標（SDGs）』）」（後藤芳一）	11
<事務局長だより> 乗り降り文化の相違点（星川安之） 共用品通信 奥付	12



第42回、国際福祉機器展 主催者特別コーナー ～いつまでも元気で働く10のコツ！展～報告

■はじめに

共用品推進機構では、毎年秋に行われる国際福祉機器展（H.C.R.）の主催者特別コーナー「高齢者・障害者等への生活支援コーナー」の企画・運営への協力を行っている。今回は、「働く」をテーマに、「いつまでも元気で働く10のコツ！展」のタイトルで実施した。



■働くコツ10カ条

歳を重ねても元気で働くには、どのようなコツや道具があるのか。(株)高齢社及び(株)かじワンに所属する60歳以上の方々と結成された「高齢者なんでも調査団」の中で現在働いている方249人へのアンケート調査をもとに、「いつまでも元気で働くコツ」を10カ条にまとめた。

**いつまでも元気で働く“10のコツ”**

健康

- ① 毎日歩く（一日一万歩、足を動かすこと、自分のペースでウォーキング）
- ② バランスの良い食事をする
- ③ 早寝早起きをする

身だしなみ

- ④ 身だしなみに気をつける
- ⑤ 自分から元気にあいさつをする

- ⑥ いつでも笑顔でいる
- ⑦ 人の話をよく聞く

仕事

- ⑧ 知識の収集をする
- ⑨ 楽しく仕事をする
- ⑩ 働けることに感謝する

アンケートは、「健康」・「コミュニケーション」・「身だしなみ」の3つのテーマに分けて、心がけている事を伺った。いくつか紹介したい。

「健康」に関しては、

- ・夜食は8時前に済ませる。
- ・腹八分目を心がける。

- ・いつもポジティブな気持ちでいる。
- ・楽しく気軽に過ごす。
- ・色々な人と話題を持つように心がけている。
- ・決して急がず転ばないようにする。
- ・毎日体重計に乗る。
- 「コミュニケーション」に関しては、
- ・相手の年齢に関係なく先に挨拶する事。
- ・嫌いな人を作らない。
- ・協同の汗をかく。
- 「身だしなみ」に関しては、
- ・年齢より若者向きのものを身につける。
- ・不要な物は身につけない。

アンケートの結果は、(株)ブライトがパネル化し、本展示コーナーの道しるべ役となった。

会場の入り口には、高齢社及びかじワンに実際に勤務しておられる村田勢次さんと、中村みち子さんの等身大のイラストで配置し、一番奥のコーナーで二人の鞆とその中身を展示した。



■製品展示

製品展示は、回答のあった「健康」と「身だしなみ」に、「仕事」を加え、それぞれに関連する製品を、①表示が見やすい、②聞き取りやすい音、③使い方が分かりやすい、④弱い力で扱える、⑤楽な姿勢で使える、⑥体に合うサイズがある、という基準を設け、H.C.R.出展社の製品から選び、展示を行った。

●「健康」

運動を管理する歩数計・血圧計、運動に使用

するときのポロシャツやタオル、ノルディックウォーキングを行うためのステッキ、毎朝飲んでいるスムージーを作るためのコンパクトミキサーなど



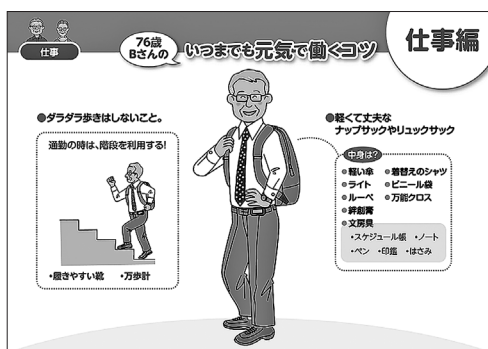
●「身だしなみ」

お客さまに失礼のないように行っている口腔ケア用のデンタルリンス、見た目が派手にならないようシンプルな洋服、体温調節がしやすいスカーフや機能性のある靴下など



●「仕事」

通勤時に交通情報や天気などを確認するためのラジオや携帯電話、突然の雨にでも対応できる軽量の折りたたみ傘、A4サイズの手帳が折れ曲がらずに入るバッグ、スケジュールを確認するための手帳、ボールペン、作業時に暗いところを照らすためのペンライトや拡大鏡、使い捨てのビニール手袋、記録を残すためのデジタルカメラやICレコーダーなど



■来場者の声

- ・元氣な高齢者のデータはとても参考になります。授業に使わせて頂きます。
- ・こんな面白い会社（高齢社）があるのですね！こんな会社が増えると良いですね。
- ・いつまでも働く人は配慮があるんだなあ、とつくづく思いました。
- ・様々な工夫で周りの人に気を使っていることを知った。
- ・こんなに素晴らしい内容を、ここでしか見られないのはもったいない。公表すべき。
- ・実際にカバンの中に入っているのか興味があったので、とても興味深く拝見した。
- ・イラストがとても良い。
- ・今日の朝、広島から来たが、このブース見たらもう帰ってもいい。
- ・人に焦点を当てた展示は素晴らしい。



■まとめ

今回の「いつまでも元気で働く10のコツ」は、少子高齢社会、そしてどの国よりも早く、超高齢社会に突入した日本にとっては、喫緊に考えていくテーマである。来場して下さる方々のパネルや製品をご覧になる真剣な眼差しから、今後も継続して考えていきたいテーマと改めて感じた次第である。

ほしかわやすゆき たくほともかず
(星川安之、田達友和)

コンビニエンスストアに関する良かったこと調査報告書、イラスト版公開へ

共用品推進機構は平成26年度事業として「コンビニエンスストアに関する良かったこと調査」を実施しました。調査結果の概要は『インクル96号』でご紹介し、現在ウェブサイトで公開中ですが、今回新たに場面毎にイラスト化し、ウェブサイトにて公開を始めました。イラスト版作成にあたっては、「コンビニエンスストアに関する良かったこと調査」でご協力を頂いた(一社)日本フランチャイズチェーン協会並びに会員企業であるコンビニエンスストア各社に再度ご協力を頂きました。また原画は故・小松昌樹さん、イラスト・デザインは西川菜美さんに作成を頂きました。

コンビニエンスストアでの良かったこと ～人の対応と設備～

今回のイラスト版では、回答者の声を5つの場面に分け、良かったことをイラストと吹き出しを付けて紹介しました。点線の吹き出しは「人的配慮」について、実線は「設備機器」について記載しました。

ここではそのコメントの一部とイラストのイメージをご紹介します。

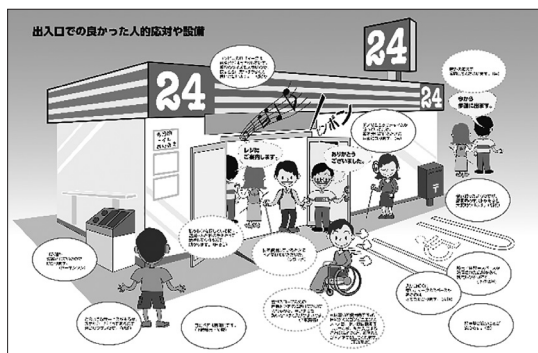
出入口での良かった人的対応や設備

《人的配慮》

- ・杖を使用している時にドアを開けていただいた。(リウマチ)
- ・私は車いす使用者ですが、自宅近くのコンビニエンスストアは、ドアは自動開閉しませんが、私が入店することに気がつくとお店の人がドアを開閉してくれます。(下肢障害)

《設備機器》

- ・ドアのところでチャイムが鳴っているため、道を歩いているときの目印になります。(盲)
- ・自動ドアはありがたいです。(下肢障害・多数)
- ・どのようなサービスがあるか、ステッカーが貼ってあるので分かりやすいです。(難聴)



【イラスト1：出入口での良かった人的対応や設備】

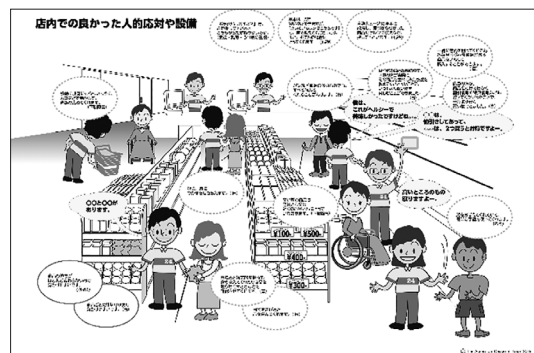
店内での良かった人的対応や設備

《人的配慮》

- ・食べ物の商品説明の中で、店員の方が実際にその商品を食べてみた感想を教えてくださいましたことで、いつもより買い物を楽しむことができました。(盲)
- ・「お手伝いしますか？」等、声をかけて下さると、こちらから尋ねやすいです。(弱視・難聴・うつ病の重複)
- ・移動の邪魔にならないようにかごなどを動かして通路を広めてくれます。(下肢障害)
- ・高い所の商品は店員さん又は近くのお客さんにとっていただきます。(下肢障害)

《設備機器等》

- ・商品の位置がほとんど変わらないので分かりやすいです。(多数)
- ・商品ごとに仕切りがあり分かりやすいです。(盲)
- ・人が多く並んでしまうような商品は広めのところに設置してあります。(下肢障害)
- ・高い棚に陳列していないので手が届きやすいです。(リウマチ)
- ・男性用トイレも洋式、手すり等を備えている店舗が多く助かっています。(パーキンソン)



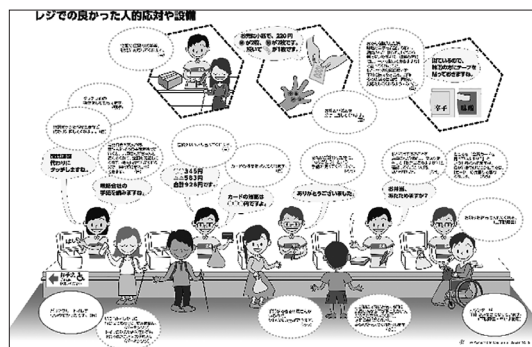
【イラスト2：店内での良かった人的対応や設備】

レジでの良かった人的対応や設備

《人的配慮》

- ・おでんを購入した際、味噌と辛子を希望する私に店員さんが、「形が同じだから判らないですよ。味噌の方にセロテープを貼っておきますね」と言ってくれたこと。私が上記の対応の良さを本社に伝えたところ、以後その店舗では自然に同様の対応をしてくれるようになりました。(盲)
 - ・宅配の伝票の代筆等、親切に対応してくれます。(盲)
 - ・お札と小銭とを分けて渡してくれます。(盲)
 - ・私がろうであることを店員さんが理解し、マスクを外して「お弁当温めますか？」と確認してくださった時、助かりました。(ろう)
 - ・支払いが終わった後に、「ありがとう」という手話を使ってくれました。(ろう)
 - ・お釣りを財布に入れてくれる。(上下肢障害)
- ### 《設備機器等》
- ・カウンターがちょうどよい高さになっています。(下肢障害・車いす使用)
 - ・バリアフリートイレで使いやすかったです。(盲)
 - ・レジの上にメニューがあり、指さしで注文できるのでありがたいです。(ろう)

- ・レジの表示が客側を向いており、見て確認しやすいです。(ろう)
- ・料金を支払う時、手が不自由なので「荷物置き」があるのが助かります。(リウマチ)



【イラスト3：レジでの良かった人的対応や設備】

全体のイラストは以下からダウンロードできます。ダウンロードはA3版(PDF)とA4版(PDF)の2パターン準備しています。A3版は情報を1枚にまとめていますが、A4版は身体特性から見た情報をまとめています。(コンビニエンスストアに関する良かったこと調査)

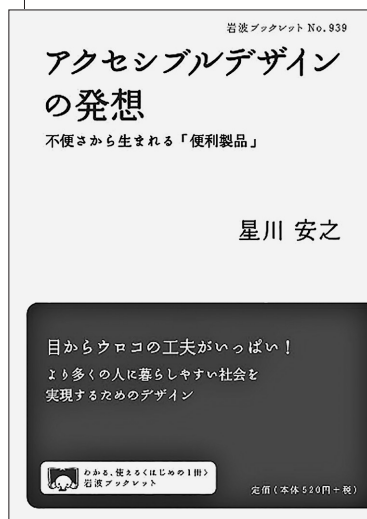
http://www.kyoyohin.org/ja/research/report_conveniencestore.php

もりかわ み わ
(森川美和)

【新刊紹介】『アクセシブルデザインの発想

不便さから生まれる「便利製品」』(岩波ブックレット)

共用品推進機構専務理事 星川安之著



目からウロコの工夫がいっぱい！

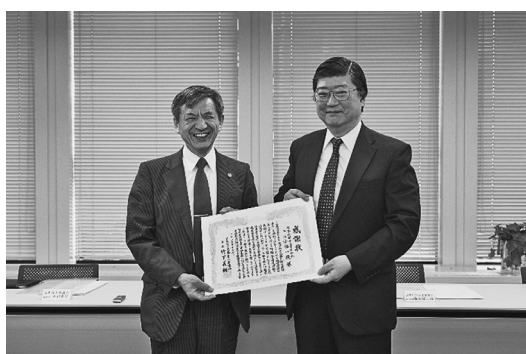
より多くの人に暮らしやすい社会を実現するデザイン

シャンプー容器側面のギザギザ、ONスイッチ上の凸点、振動で計測終了を伝える体温計……。これらは、アクセシブルデザイン(AD)と呼ばれ、目や耳が不自由であるなど、「マジョリティ」に属さない人々が日常を暮らしやすくするための工夫である。その開発・普及活動の中心にいて国際規格化でも世界をリードしてきた著者が、ADの可能性を語る。

ボディソープ、触覚識別推進への感謝 日本盲人会連合会から、日本化粧品工業連合会へ 感謝状贈呈式

10月7日東京港区の日本化粧品工業連合会において(社福)日本盲人会連合から3つの化粧品工業団体から構成される同連合会への感謝状贈呈式が行われました。

式は、日本盲人会連合の^{きむらこうへい}木村幸平氏よりの贈呈式に至った経緯報告の後、同会^{たけしたよしき}竹下義樹会長より、日本化粧品工業連合会の^{やまもとじゅんじ}山本 順二専務理事に感謝状が贈呈されました。



感謝状

日本化粧品工業連合会
会長 小林 一俊 様

この度貴会が全身洗淨料の容器に「触覚識別表示」を採用されたことによって視覚障害のある者がシャンプーと同様全身洗淨料を識別することが可能になりました

以前から行われているこの取り組みは視覚障害者の自立を支援する重要なことであると共に視覚障害者が権利の主体として生活する重要な支援策であると考えております

このような取り組みを続けてくださる日本化粧品工業連合会様に対し日本盲人会連合会員一同深甚なる感謝の意を表します

平成27年10月7日
社会福祉法人 日本盲人会連合
会長 竹下義樹

■感謝状贈呈式までの経緯

日本盲人会連合は1948年(昭和23年)視覚障害者の「自立と社会参加」の実現を目的に組織され、会員数約50,000人で構成されています。

視覚障害者は、印刷され凹凸のない表示を識別することが困難です。シャンプーとリンス容器もその一つでしたが、その不便さの声がメーカーに届き、1992年、シャンプー容器の側面に

ギザギザがつきリンス容器との識別できるようになりました。このギザギザは、日本化粧品工業連合の尽力も大きく、日本工業規格(JIS)にも採用され、現在ではほぼ国内で市販されている全てのシャンプー容器に広がっています。

しかし風呂場には、リンスと同形のボディソープ容器もあります。ボディソープを識別できないことも視覚障害者にとって不便さの一つでした。その不便さの声は、容器JIS改定時に、(公社)日本包装技術協会に設置された委員会に届き、関係機関が集まり検討、試作品での検証が繰り返し行われました。その際日本化粧品工業連合会は、ボディソープメーカーの調整役を行ったばかりでなく、ボディソープ容器の側面か上部、又はその両方に「直線状の凸線の印」を配置することを委員会に提案されました。その案がJIS S 0021包装-アクセシブルデザイン-一般要求事項の改定の際、採用されたのが2014年の5月のことです。

その後、このJISは、日本化粧品工業連合会から会員企業に対して情報提供が行われ、その結果、JISに掲載された凸線を採用したボディソープが、2015年2月より複数社から販売されるに至りました。

今回の凸線は、当事者団体が不便さを企業に伝

えるところから始まりました。その課題を多くの関係機関で共有した結果、凸線という回答を導き出しJISに採用された結果、複数企業から凸線がついた商品が出るに至りました。そして今回の感謝状、リレー競技に例えると、当事者団体からメーカーに「たすき」がしっかり渡されたという大きな意味があると思います。



「平成27年度ADフォーラム」開催

日時：平成27年10月22日（木）13時30分～16時

場所：共用品推進機構 会議室

主催：アクセシブルデザイン推進協議会

ADフォーラムでは、関係団体の日本レストルーム工業会をはじめ、幹事団体が、平成26・27年度の活動報告を行った。また、（社福）日本盲人会連合 副会長の鈴木孝幸氏、（公社）日本リウマチ友の会 会長の長谷川三枝子氏、経済産業省の加藤二子氏も出席し、コメントをいただいた。

- ◆鈴木氏：業界団体からの報告を聞いて、生活に密着した情報があるので、当団体の女性協議会の人たちにも有益である。
- ◆長谷川氏：リウマチ患者は人の手を借りることが多く、それを辛く感じる。温水洗浄便座が公共トイレに設置されたとき、初めて外出が苦にならなくなった。機構が行っている「良かったこと調査」に協力したが、これまでの不便さを調べることで違い、発想の転換ができて大変良かった。
- ◆加藤氏：安全を求める人たちの願いから始まった工業標準化は、非常に大事なことで、国の宝にして広げていきたい。（写真：左から鈴木氏、長谷川氏、加藤氏）

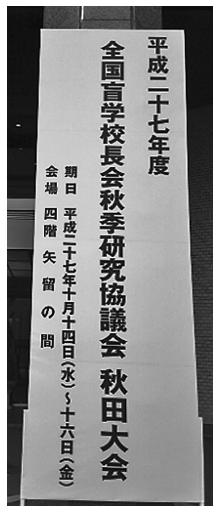


「平成27年度全国盲学校長会秋季代表者研究協議会」 子供向け事業の連携を推進

平成27年10月15日（木）～16日（金）に、秋田キャッスルホテル（秋田県秋田市）で「平成27年度全国盲学校長会秋季研究協議会（秋田大会）」が行われた。同会は全国の盲学校（視覚障害教育校）が当面している諸課題を中心として研究協議を深め、その解決と校長としての職能の向上を図り、視覚障害教育の充実・発展を図ることを目的としている。

この協議会の前日14日（水）には、全国盲学校長会の代表者が集まる協議会が開催され、共用品推進機構の事業全般と子供向け事業の展開事例を報告した。また、現在は特別支援学校との密接な連携が少ないことを課題とし、今後は盲学校（視覚障害教育校）と一緒に教育展開の必要性を、事例を交えて報告した。これに対し全国盲学校長会長を務める三谷照勝文京盲学校

長からは、「この連携は視覚障害児・者の未来のためになるものである」と、全国の盲学校長に協力の依頼をして下さった。



【写真：協議会で報告をする星川安之専務理事】

読む人の心をパタパタと開く 故・小松昌樹さんが創りだした 共用品パンフレットの世界

■計 報

「9年にも及ぶガンとの闘いに終止符を打ち、夫、小松昌樹（享年60歳）は、2015年9月12日午前5時54分永眠いたしました。幾度となく奇跡的な復活を遂げた超人も、消え入るように自然と息が途絶え、とても穏やかな最期でした。」

奥様の小松奈尚美さんから知らせをいただき、9月15日のお通夜、棺に入っても鼓動が聞こえそうな小松さんに会ってきました。

■「パタパタ」はどうですか？

小松昌樹さんと共用品推進機構が出会ったのは、機構が財団法人になった1999年。郵政事業庁からの依頼で「郵便局を利用される高齢者及び障害のある人へ、郵便局職員がどのように応対したら良いか」調査・検討し、その結果を全国の郵便局職員に何らかの形で伝えるというプロジェクトであった。

大手広告代理店と共に、パンフレット等のデザイン製作を手掛ける会社「グリックス」のメンバーとして参加されたのが小松さんだった。

今でこそ、サービス業において高齢者・障害のある人への応対を考えるのは「当たり前」になりつつあるが、当時「障害者」は、多くの企業にとって腫れ物に触る感覚の対象であった。

今からふり返ると、郵政事業庁のそのプロジェクトは、「腫れ物」のレッテルを剥がすきっかけとなった。

通常、障害のある人たちの日常生活における不便さ調査を行ってきた経験を機構が提供し、郵便局の実態を郵政事業庁が提供するまでであれば、報告書で終わる。しかし、全国に約4万4千箇所ある郵便局の職員に、「文字とグラフだけの報告書を読んで下さい」では、一方通行の押し付けで終わってしまう。しかしその報告書に「生命」を与えてくれたのが小松さんだった。

高齢者及び障害のある人たちが、郵便局を利用する際、どんな不便さがあるか、それを解決するために、職員は何をすれば良いかを伝えることが目的であるが、一番肝心なことは、それを読んだ

職員の人達が、それを自分ごととして心の中にストンと落とし、明日からでも実行できることである。

「パタパタと開くようにしませんか？」パンフレットを煮詰めている会議で提案したのが小松さんだった。

プロジェクトメンバーの誰もが「パタパタ？」と無言の「？」の空気が流れ初めた時、小松さんは、「受け身ではなく、能動的に読んでもらうことが今回のパンフレットには必要と思います。そのため、障害のある人達が、郵便局を利用する際に感じる不便さを、イラストとそれを補う言葉で説明し、その不便さを解決するヒントを、読み手が自ら開く仕様で紹介してはどうですか？つまり、読み手がページを自ら能動的に広げるわけです。」という提案であった。

プロジェクトメンバーは、パンフレットを「能動的に読む」という提案に、今までモヤモヤしていた気持ちが晴れ、目からウロコが落ちた瞬間となった。メンバー全員の賛同を得た「どこでも、だれでも、だれにでも」と題された、パンフレットは日本全国の郵便局に配布され、全国各地の郵便局で「パタパタ」が行われた。

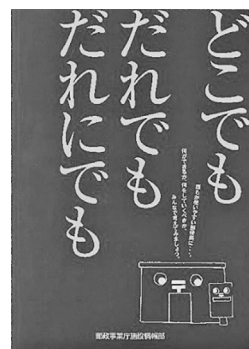


図1 郵政事業庁パンフレット

■共用品を、子供達に伝えたい

発足当初の機構では同時期、子どもたちに「共用品」をどう伝えたら良いかという大きな課題を抱えていた。読む側が能動的に参加できるパンフレットを作りたい。大手広告代理店に了解を得て、直接小松さんに相談した。「ワクワクしますね！」が小松さんの答えだった。

パンフレットの名称を「共用品って何だろう？」に決め、何度も議論を繰り返した。

障害の有無に関わらず共に使える製品やサービスを日本で共用品・共用サービスと名付け、その

普及を行い、その市場も広がりはじめた。けれど、メーカーや流通、当事者にいくら伝わっても、障害の有無の「無」の人達、とりわけ次の世代を担っていく子供たちに共用品を知ってもらわなければ、先細りになってしまう。それには、小松さんが発想する「パタパタ」の要素である「能動的に読んでもらう事」が必要である。

障害のある人の不便さ、その解決案、具体的な製品の紹介と「共用品って何だろう？」のパンフレットは順調に議論が進み、最終段階に入った。仕様を決定する会議の日、なんと、小松さんが発した言葉に皆耳を疑った。「このままでは、子供たちの心に届かないように思います。1週間、時間をもらえますか」。

1週間後に示された案は、誰もが考えもしないアイデアであった。「日本語は、縦からでも横からでも、読み書きができます。縦書きと、横書きがまじって日本の社会を構成しています。障害の有無も、縦書きと横書きに似ているように思います」との説明後、鉛筆書きの案は、パンフレットの表と裏の区別がなく、どちらも「表紙」となっていた。一方の表紙は縦書きに、もう一方の表紙は横書きになっていて、ページの真ん中で、横書き、縦書き、つまり、ここでは障害のある人、ない人が出会うようになっている。しかも、真ん中のページは、小松流のパタパタがしっかり継承されている。

できあがったこのパンフレットは多くのマスメディアに取り上げられ、多くの小学校で副読本の位置づけで使用され、今でもリクエストが絶えない状況である。



図2 共用品ってなんだろう

■公共窓口のおもてなし

それから数年後、内閣府の障害者政策担当の審議官から、「公共窓口に来られる障害のある人たちへ、どのように対応したら良いかのマニュアルを作りたいのだが、協力してもらえないか？」と

の連絡があった。

今度は、郵便局の時と違い、障害者の不便さやニーズは、各障害別の当事者団体にヒヤリング調査を行い、受ける側の公共窓口の人たちにもどうしてよいか分からない応対場面に関してヒヤリングを重ねる大がかりのものとなった。

何度も会議を重ねできあがったガイドラインが



図3 公共サービス窓口における配慮マニュアル

図3である。イラストのタッチ、構成を小松さんが担当し、何度も修正を重ねながらねばり強く完成させた。このガイドラインは、ギミックとしての「パタパタ」を付けることはしなかったが、このテーマで公

的機関である内閣府が、全国の公共窓口配布したこと自体が、「パタパタ」であった。その結果、2005年に愛知県で行われた万博「愛・地球博」の、長久手と瀬戸の日本政府館での「バリアフリー応対マニュアル」の依頼から始まり、全国銀行協会、水族館、各種イベント、携帯電話ショップまで、幅広い「応対」の発生する企業・団体からマニュアル作成の依頼が届いたことから分かる。

■東京文化会館

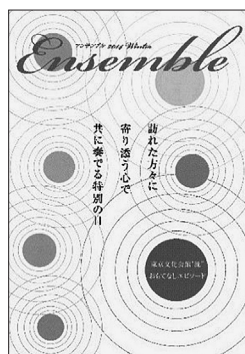


図4 東京文化会館おもてなしエピソード

2014年、小松さんの最後の仕事となってしまったのが、東京文化会館から依頼で作った「東京文化会館流おもてなしエピソード」である。

これまで小松さんが手がけてきた応対マニュアルは、「不便さ」をどう解決するかという横軸がぶれずに貫

かれている。その横軸に、このエピソード集では縦軸、つまり良かったことが加わっている。

良かったことをみんなで確認し、褒め、広げていくという新しい「パタパタ」を、小松さんがこのパンフレットで示してくれているのである。パタパタはいつか閉じる時がくる。けれど、必ずどこかで新たなパタパタが開かれると信じている。

(文責 星川安之)

アクセシブルデザイン 国際標準化 進捗状況

共用品推進機構が関わっているアクセシブルデザインの国際標準化の状況、下記お知らせします。

1. ISO/DIS 19026 「アクセシブルデザインー公共トイレの壁面の洗浄ボタン、呼出しボタンの形状及び色並びに紙巻器を含めた配置」

2015年7月にDIS投票（国際規格案投票）で承認され、その後FDIS投票（最終国際規格案投票）を省略して、直接発行に進むためのCIB投票（委員会内投票）が2015年8月に承認されました。現在国際規格発行を待っている段階で2015年度内には発行予定です。

2. ISO/DIS 19027 「絵記号を使用したコミュニケーション支援用ボードのためのデザイン原則」

2015年9月にDIS投票で承認されました。DIS投票の際に重要なコメントはなかったので、一部ドラフトを修正して、直接国際規格発行に進むための書類提出を2015年10月に行いました。この規格も2015年度内には発行さ

れる予定です。

3. ISO/DIS 19028 「アクセシブルデザインー触知案内図の情報内容及び形状並びにその表示方法」

2015年9月にDIS投票で承認。この規格については、意見の異なる国があり調整が必要であったため、第3回ISO/TC 173/SC 7/WG 5（触知案内図作業グループ）会議を2015年10月8、9日、共用品推進機構で開催しました。この会議での議論を経てドラフトの修正を行い、WG（作業グループ）メンバーの承認を受けた後、2015年11月にFDIS投票を省略して、直接発行に進むためのCIB投票を行う予定にしております。この規格の発行は2016年度になると思われます。

4. ISO/DIS 19029 「アクセシブルデザインー公共施設における聴覚的誘導信号」

2015年7月にDIS投票で承認され、その後FDIS投票を省略して、直接発行に進むためのCIB投票が2015年8月に承認されました。現在国際規格発行を待っている段階で、2015年度内には発行される予定です。まつおかこういち（松岡光一）

共用品推進機構 標準化事業に関わる賞W受賞

この度、業務部調査研究課課長 かなまるじゅんこ 金丸 淳子と業務部国際業務課リーダー 松岡光一が国際標準化並びに国内標準化の荣誉ある賞をそれぞれ受賞しました。日頃よりご支援を頂いております皆様のご協力の賜物でございます。今後とも標準化事業に邁進して参りますので、引き続きご支援の程よろしく願いいたします。

平成27年度「日本規格協会 標準化奨励賞」（10／2） 業務部調査研究課課長 金丸淳子

【主な功績】

高齢者・障害者関連のJIS開発を12年に亘り推し進め、多くのJIS原案作成に携わった。また、当協会（日本規格協会）自ら作成したJISを審議する規格委員会の委員を始め、高齢者・障害者の規格を審議する規格調整委員会の委員を8年に亘って務め、この分野の標準化の推進者として今後の活躍が期待される。

平成27年度「国際標準化貢献賞表彰」（10／5） 業務部国際業務課リーダー 松岡光一

【主な功績】

高齢者・障害者の配慮に関する規格（アクセシブルデザイン規格《AD》）の根幹となるISO/IECガイド71（規格におけるアクセシビリティ配慮のためのガイド）の改訂に関し、各国の代表者から積極的に意見を収集し丁寧な説得を重ね、最終的にすべての関係者が納得いくような形にまとめた。

多数のAD規格の国際幹事及びWGコンビナ兼プロジェクトリーダーとして、各国と連携し標準化推進をリードするなど収束が難しい状況であっても、終始冷静に対応し、決着させるなど功績は多大。

「社会の要請と共用品（その7：国連『持続可能な開発目標（SDGs）』）」

ごとうよしかず
後藤芳一（日本福祉大学客員教授、東京大学大学院教授）

国連^{77~818388}（小さい添え字^{①~88}は、同様の用語が本講の第1～88講に既出であることを示す）は9月25日に「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）⁸⁸」を採択した。期間は2016年から2030年、幅広い社会的課題^{①1518272831326773~7678~8183~88}を包括的に捉え、国際的に協力^{③934424421767888}して対応する。今年は大きな節目の年となった。

1. 概要

SDGsは17の目標（ゴール）と、169のターゲットを掲げた。貧困^{①1838788}解消（目標1）、飢餓^{②33388}終焉（目標2）、生活^{79~81}・福祉^{④124445484960642}（目標3）、教育²⁹³⁹⁴⁰⁷⁶⁷⁹⁸⁰⁸⁵⁸⁷⁸⁸（目標4）、雇用^{52635739407476777981~83858788}（目標8）、不平等^{77~818388}削減（目標10）、都市と暮らし^{②36921~232829313640424273747682}（目標11）、消費⁴⁴⁴⁷⁴⁸⁵⁸⁵⁹⁶²⁷¹と生産（目標12）、気候変動^{③3~65672~76808183~88}（目標13）、インクルーシブ社会^{③28317475}（目標16）が含まれる。

このうち目標3（あらゆる年齢のすべての人の健康な生活と福祉（well-being））、目標4（すべての人への包括的教育）、目標8（すべての人への完全で生産的で適切な雇用）、目標11（安全⁷⁶⁷⁸⁸⁸、インクルーシブで持続^{⑤8388}可能な都市と暮らし）、目標12（持続可能な消費と生産）、目標16（平和でインクルーシブな社会）は共用品^{③610131416~37404244~86}とも関わりが深い。

2. 経緯と背景

(1) 経緯

国連は2000年から2015年まで貧困対策を目的として「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）」を進めてきた。SDGsはその後継であることに加え、①より包括的（貧困から他へ拡大）、②先進国にも広げた。

(2) 背景

SDGsは国連持続可能な開発会議（「リオ+20」、2012年開催）の決定を受けて策定された。SDGsは、①貧困は多くの原因が複合^{⑥18387}して生じる（→分野を拡大）、②原因は途上国での開発行為だけでなく（→先進国に拡大）、③条約^{③92427577~80}での取組み（例：気候変動、生物多様性^{③448384}）は苦戦などの経験を映させている（→MDGs、SDGsは条約ではない）。SDGsは国際的な課題解

決方法を模索する意味もある。

3. 特徴と意義

SDGsの掲げる目標の多くは先進国にも共通する。貧困（格差）（目標1）、生活と福祉（目標3）、教育（目標4）、ジェンダー⁸⁸（目標5）、水⁸³⁸⁷⁸⁸（目標6）、エネルギー^{⑥183}（目標7）、雇用（目標8）、不平等（目標10）、都市と暮らし（目標11）、気候変動（目標13）などである。インフラ（目標9）、消費と生産（目標12）、インクルーシブな制度と社会（目標16）、国際協力（目標17）は対応策を示している。

並行する動きとしてESG投資がある。環境（Environment）、社会（Society）、企業統治（Governance）⁸⁸の視点で事業や投資の価値を測る。2006年に国連が「PRI」（責任投資原則（責任ある投資家の取るべき行動）＝投資判断に際しESGの観点を組み込む、投資先にESGに関する情報^{②719~212326293140417476~80818387}開示を求めるなど）を提唱したのが契機になった。年金積立金管理運用独立行政法人は9月16日にPRIに署名し、安部総理が国連総会演説で明らかにした。

今後は政府^{①2478121826~28303239405174757981~88}が資金運用や投資を行うに際し、SDGsをESGの重要な指標にすることが考えられる。日本は遅れていた（例：EGS投資は世界の運用資産^{①12474~7682~8487}の2割超、欧州^{7678~81}で5割あるが日本は1%未満といわれる）が、政府が注力し始めたことで、普及が加速する可能性がある。

4. 共用品との関わり

SDGsやESGの動きと共用品への取組みの共通点は、①対象とする分野（本稿1. 後段参照）、②社会への寄与と経済的価値を調和（方向性）、③政府や産業界^{③5811214171822336~38627182}をはじめ幅広い関係者が国際的に協調（マルチステークホルダー・アプローチ）（体制）などである。改めて共用品の取組みが先進的であると分かる。

一方、SDGsから共用品へは、①他の分野との協力の必要性（課題は関わり合って生じる）、②相手（例：SDGsでは途上国、共用品では不便さのある人）への寄与を経て、自身（例：SDGsでは先進国）の問題も大きいと気づかされ、自身の内部を変える行動につながる点が参考になる。

乗り降り文化の相違点

■広州の活気と地下鉄

11月初旬、十数年ぶりに中国・広州に行く機会がありました。十数年前よりも数倍「活気に溢れている！」が空港に降り立った時の印象です。商店街を歩けば、多くの店から軽快なリズムの音楽が流れ、人気飲食店には行列ができています。前回の出張の時と違い、今回は地下鉄に乘る機会が多く、ここでも「活気」が繋がっていることを感じます。

「中国の人は、電車に乗る時に並ばない」と聞いていたので、本当か？の疑問を持ちながらの乗車となりました。結果、「降りる人を待たずに、乗り込む人が大半」と、聞いていた情報は、正しかったと納得しました。

けれども、降りる大半の人も、乗り込んだ時には「待たずに乗ってきた人」のため、待たずに乗り込んでくる人に「文句」や「異議」を申し立てたりはしません。

降りる人は心得たもので、乗り込む人とお互いの身体が触れ合うこともなく、神業のように降りていくのです。しかも、ドア付近に乗っている人の大半は、自分が降りる駅でない限り、一度ホームに降りて、降りる人への道を作ることはありませんでした。

そのため、ドア付近にたたずみ降りない人は、降りる人ばかりでなく、乗り込む人にとっても、大きな関門になるわけです。けれどもこの関門の存在、降りる人も、乗り込む人も、両者に認められているようで、誰も「どけ！」などと決して言わず、押しやりもしないのです。試しに一度「ドア付近にたたずみ降りない人」をやってみたところ、誰からも押されることも、嫌な目でにらみつけられることもありませんでした。

そうまでして、乗り込んで勝ち得た席ですが、若い人から中年あたりの人までは、後からゆっくり乗ってきた高齢者や子供を抱えて乗り込んできた人を見かけると、自らその人たちに声をかけ、座席を譲る光景を見たのも、一度や二度ではありませんでした。

■ダメな場合は、あきらめる

もう一つ奇異に感じたのは、広州の人たちは、地下鉄に乗り込むにあたり、「あきらめ」が早いということです。

前記したように、車内が混んでいるといっても、隣の人の身体と触れ合うことはありません。ということは、混んでいると言っても、日本の早朝ラッシュのようなことにはなりません。なぜならば、車内の人は、身体が触れ合う直前で止まるという神業を習得しているため、それ以上乗らずにあきらめ、次の地下鉄を待つのです。

更に、地下鉄が発車する音の合図があってから、駆け込む人を、一人も見かけませんでした。

つまりここでは、日本のように「ぎゅうぎゅう詰め」になる前に、乗ろうとする人の気持ちが、次の電車を持つことに切り替わっているようでした。

このことを、中国に駐在している日本人に話したところ、「遅刻をしてくる人が少なくない。なぜ遅れたかと問うと、『電車が混んでいました』という答えが返ってくる」とのことでした。

日本の乗り降り文化は、混雑時は身体が触れ合う、ベルがなっている間であれば、駆け込みは許される、ただし、降りる人が降りてから乗るというものです。

広州で体験した活気あふれる乗り降り文化に比べると、日本の文化は、時間に遅れない代わりに、大切な何かが欠けているのでは、と思った次第です。

きちんと並ぶけれど「ぎゅうぎゅう詰め」になり、時には怒りが芽生える日本と、きちんと並ばないけれど「ぎゅうぎゅう詰め」にならず、怒りが芽生えない広州。

きちんと並んで更に「ぎゅうぎゅう詰め」にならず、怒りが芽生えないとなるには、どんな仕組みと思考が必要なのかと思った次第です。

星川
安之
やすゆき



事務局
長
だより

共用品通信

【イベント】

【10月】
ADフォーラム (22日)

【会議】

【9月】

第1回医療機関に関するよかったこと調査委員会 (2日)

第1回TC159国内検討WG委員会 (2日)

第1回JISZ8071改正原案作成委員会 (4日)

第2回操作性WG委員会 (15日)

第1回音声案内JIS検討委員会 (25日)

【10月】

第1回触知図委員会 (1日)

第1回消費生活用製品のAD使用性評価検討委員会 (1日)

第1回AD適合性評価制度検討委員会 (1日)

第3回ISO上層委員会報告会 (22日)

【外部主催会議】

【9月】

第3回桜雲会編集会議 (森川、28日)

第2回情報発信・標識作業部会 (森川、29日)

第2回接遇・心のバリアフリー作業部会 (金丸、30日)

【10月】

第3回情報発信・標識作業部会 (森川、23日)

第3回接遇・心のバリアフリー作業部会 (金丸、23日)

【講義・講演】

【9月】

神奈川福祉保健大学の学生に講義 (8日、星川・金丸)

【10月】

八王子山田小学校共用品授業 (森川、5日)

新潟県糸魚川高等学校共用品授業 (森川、7日)

シニアライフコーディネーター養成講座 (星川、17日)

新宿区立四谷小学校研究発表会 (森川、13・23日)

大阪府吹田市「ニフレル」バリアフリー研修 (星川、29日)

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第99号

2015 (平成27) 年11月25日発行

"Incl." vol.15 no.99

©The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2015

隔月刊、奇数月発行

一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要の方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (公財) 共用品推進機構

郵便番号 101-0064

東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F

電話: 03-5280-0020

ファクス: 03-5280-2373

Eメール: jimukyoku@kyoyohin.org

ホームページURL: http://kyoyohin.org/

発行人
事務局

鴨志田厚子
星川安之
森川美和
金丸淳子
松岡光一
田窪友和
本田和枝
青山泰隆
一言映子

執筆・協力 後藤 芳一
(五十音順) 関戸 菜美
中野奈津美

印刷・製本 サンパートナース(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。